

中国語の自然対話における否定応答表現“没有 meiyou ¹ ”の使用データ収集	
新沼 雅代	比較社会文化学専攻
期間	2007年12月3日～23日
場所	中華人民共和国 北京市
施設	北京大学、清華大学、北京語言大学

内容報告

1. 本調査の必要性と目的及び目的の達成

本報告書は、2007年度大学院教育支援プログラム「日本学研究の国際的情報伝達スキルの育成」の支援を得ておこなった海外調査研究の報告書である。本調査の目的は、中国語の否定応答表現“没有”の実際の使用データを収集することであった。拙著「中国語の否定応答表現“没有”について」で導き出した結論²を実証的データで裏付け、論拠をより強固なものにしようという意図があった。これは博士論文を執筆するうえで、その一部を構成するものとなる。

まず、否定応答表現“没有”の研究（以下、「本研究」）の目的は、中国語母語話者が“没有”を選択する際の要因を明らかにすることである。“没有”は、所有・存在の否定、アスペクト詞の否定などと文法的に説明できるが、現実の対話における否定応答表現の“没有”には、通説的な文法的説明では解釈できない場合がある。否定応答表現の“没有”に、語用的観点から説明を与えることが本研究の具体的な目的である。報告者は、これまで一貫して中国語の否定応答表現について研究してきた。これまで、否定応答表現の使用例は、文学作品とテレビのインタビュー番組から集めてきた。文学作品は、インターネットからダウンロードし、コーパス化することで、容易に検索できるが、インタビュー番組は、目的とする用例を見つけるために、多くの番組を見なければならず、効率的とはいえない。さらに、研究結果をより精密なものにするために、文学作品等の使用例ではなく、自然発話における使用例が必要であった。自然発話の使用例を実証的データとするには、比較的多数の用例が必要であり、中国語母語話者と接触しやすい現地での調査が不可欠であった。

また、当初、本調査では、中国人母語話者との面接による調査を予定していたが、実際は、質問紙による

調査に変更を余儀なくされたということをお断りしておかなければならない。最大の原因は、事前に、面接の被験者を確保しておくことができなかったことである。現地で直接面接を依頼したのだが、うまく調整ができなかった。面接の内容は、政治や宗教に全く関係がないことであったが、回答者にとって、自分の発言を録音されることは、実施者側が想像する以上に抵抗があったためだとも考えられる。そこで、急遽、質問紙を作成し、調査を実施した。質問紙は、文脈設定をしたうえで、質問に対し最も適していると思われる否定応答表現を選択肢項目の中から選択してもらう形式をとった。結果、合計86名から回答を得ることができた。

2. 本調査の研究経過と今後の研究計画

報告者は、これまで一貫して中国語の否定応答表現と否定詞の問題を取りあげてきた。中国語では否定応答表現と否定詞が同形式になる。中国語教学の場では、往々にして、否定応答表現の使い分けは、否定詞と同じであるかのように、学習者に説明されている。だが例えば、日本語の応答詞は、話し手³が相手発話をどのように処理したのか、その反応を端的に表わすものである⁴。相手発話を話し手がどのように受け取り、そしてどのように処理したかによる、という意味で、応答詞の使用は話し手主体であるといえる。中国語の否定応答表現も、否定詞の文法的に説明できない使用があることを考えると、日本語の応答詞同様に、話し手主体であるといえよう。中国語教学の初級教科書では、よく日本語の応答詞「いや」「い（い）え」に、否定応答表現の一つである“不”をあてて説明している。しかし実際には、日本語の「いや」「い（い）え」は、全ての状況で“不”に言い換えられるのではない。例えば、「い（い）え」は、それだけで完結した発話になることがままある（串田2005:44）が、“不”は中

国語の会話において、それだけで完結した発話になりにくく、“不”だけで発話を完結させると、語気が非常に強く（新沼2007）、「いや」「い（い）え」は、文脈によって、“不”ではなく、他の否定応答表現の方がよりふさわしい場合がある。応答の仕方は、コミュニケーションにおいて、基礎的かつ重要であり、近年、外国語の教学において、実際の場面に即した内容を教えることが重要だとされているにも関わらず、このような説明では、中国語学習者が母語話者とのコミュニケーションの際、思わぬ誤解を生じさせてしまう恐れがある。中国語の否定応答表現については研究が不足しているのが現状である。

以上のことから、報告者は、中国語の否定応答表現に関心を抱き、研究を進めてきた。その過程で本研究の“没有”の問題に着手した。今後、中国語における否定応答表現の体系を語用的観点からまとめ、全体的

には、学位論文で「中国語における否定応答表現の体系（仮）」について執筆したいと考えている。

3. 調査の内容

外国語教育や言語学に関する質問紙調査を行いたいと考えたとき、質問用紙がいったいどのような様式なのか、知りたいと思うのが一般的だろう。しかし、論文や報告書では、調査結果が数値化され、図や表に加工されており、質問紙そのものを載せているものは少ない。以前に何らかの質問紙調査に回答したことがあっても、質問紙は実施者に回収され、回答者の手元には残らない。そこで、本報告書では、報告者が今回初めて行った質問紙調査の質問紙様式と内容について、良かった点と問題点を中心に紹介したい。今後、なんらかの質問紙調査を実施しようと考えている人の参考になればと考える。

Ochanomizu University, Japan School for the Comparative Study of Societies and Cultures Niinuma, M. A.,
Ph. D. candidate 新沼 雅代 人間文化研究科 比較社会文化学 新沼雅代 博士研究生

问卷

此问卷以研究否定回答形式为目的，不用于衡量个人的语言能力。我在日本国立大学研究语言学。
调查结果只供本人研究参考，不会转发给第三者。

(如果可以的话，请在下面选择项上划圈。)

· 在平时说话时，哪种方言对你的影响最大? 北京、广东、闽南、上海、东北、山东、其它()

· 年龄 ~19岁、~29岁、~39岁、~49岁、~59岁、~69岁、~79岁、80岁~

· 性别 男、女

在以下的假设情景中，请选择你认为最合适的回答（全部为否定形式）并划上圈；如果认为没有恰当选项，请把你认为恰当的回答写在后面的括号里。

<假设情景 A-1>
你是奥林匹克田径队的一名队员，在队里你的成绩是最好的，也很努力，每天一直练习到半夜。其他队员都认为你很好，有队员就问你①/②。其实你一点也不觉得自己好强，只是喜欢田径这个运动而已，所以你想要对他的话进行完全否定。在这种情况下，在以下的否定回答中，你认为用哪一个最合适？

①问：你认为自己很好强吗？ 答：不是、没有、不会、不觉得、不认为、其它()

②问：你认为自己很好强吧？ 答：不是、没有、不会、不觉得、不认为、其它()

<假设情景 A-2>
其实你很清楚自己是一个特别好强的人，但是如果承认的话，你会觉得有点尴尬，所以不想承认，想在口头上用否定的回答来敷衍过去。在这种情况下，在以下的否定回答中，你认为用哪一个最合适？

③问：你认为自己很好强吗？ 答：不是、没有、不会、不觉得、不认为、其它()

④问：你认为自己很好强吧？ 答：不是、没有、不会、不觉得、不认为、其它()

<假设情景 B-1>
今天是星期天，没有田径训练，你要跟你男(女)朋友一起去滑冰玩儿。对方感觉你不太想去，就对你说⑤。你没想到他(她)会这样认为，因为你觉得能跟他(她)在一起很高兴，所以你要对他(她)的话进行完全否定。在这种情况下，在以下的否定回答中，你认为用哪一个最合适？

⑤问：你好像不想去。你是不是不想去啊？ 答：不是、没有、不会、不觉得、不认为、其它()

<假设情景 B-2>
其实你不太想去滑冰，因为快要举行田径比赛了，你担心会受伤，但是又感觉如果说不会的话会对不住对方，“不想去”这样的话实在说不出口，就想对对方提出的“你是不是不想去啊？”进行违心的否定。在这种情况下，在以下的否定回答中，你认为用哪一个最合适？

⑥问：你好像不想去。你是不是不想去啊？ 答：不是、没有、不会、不觉得、不认为、其它()

非常感谢您的大力合作!

図1 本調査で用いた質問紙

まず、質問紙をドルニエイ（2003:5）にならい次のように定義する。質問紙は、①筆記式のテストではない。②生の言語データの生成をうながすための状況を提示する「談話完成タスク」ではない。本調査は、文脈を設定したうえで、対話の質問に対して回答してもらうという、談話完成タスクの要素を含んでいるが、回答を選択肢項目の中から選んでもらう形式を採用しており、談話完成タスクのように質的なデータではなく、量的で統計処理に適したデータを収集していることから、本調査で用いたものは質問紙であると捉える。本調査で用いた質問紙は以下のようなものである。

ドルニエイ（2003:153-159）は質問紙調査の作成、実施における重要なポイントを挙げている。そこから抜粋して、本調査の質問紙を5段階の評定尺度（1：全く当てはまらない、5：非常に当てはまる）で自己分析してみる。後ろの括弧に評定尺度の数字を示す。

チェックポイント

（質問紙作成）

1. 4ページを上限とし、30分以内でできるものとする。(5)
2. 質問項目の作成は、先行研究や質的研究から、合理的にリストアップする。(2)
3. 長い記述を要求する自由記述式は避ける。(5)
4. 論理的で、わかりやすく、読みやすい構成にする。問いかけるように、平易なことば遣いで。(2)
5. 事実や個人情報を問うような質問は、質問紙の最後の方に載せる。(1)
6. 色々な書式を用いる。上質の紙を用いる。(4)
7. 導入部分で、調査の内容とその重要性、調査実施団体、正解や不正解の内容はないので正直に回答してほしいこと、匿名性と守秘義務履行の約束、謝辞を述べる。(3)
8. 回答方法の例を提示し、具合的に説明する。(2)
9. 必ず予備調査をおこない、項目分析をして、不適切な項目がないか確認する。(1)

（質問紙の実施）

10. できる限り母集団の代表となるサンプルを集める。(3)
11. 統計的にみて意味のある結果が得られるように、十分な数のサンプルを集める。(2)
12. 倫理に関する原則や規定を遵守し、必要とされている許可を必ず得るようにする。(3)

以上のチェックポイントの採点結果を、図にすると以下ようになる。無論、作成者である報告者と、質

問紙の回答者では、質問紙に対する評価は異なるであろう。

本調査紙の反省点を挙げると、まず、**導入部分の記載が不十分**だった。導入部分で、何のために行う調査なのか説明していなかった。報告者は「否定応答表現の研究をしている」と明記すると、回答者が構えてバイアスがかかり、普段使っている表現とは異なるものを選択肢項目から選ぶ可能性があると考え、あえて明記しなかった。回答者にすれば、何のための調査なのか示されず、調査内容に対する心構えができないまま質問に入り、回答者は答えにくかったと考えられる。導入部分で、何を目的とした質問紙なのか回答者に理解してもらえば、回答者独自の有用なコメントを教えてくれるかもしれない、また、より積極的に調査に参加してもらえるはずである。さらに、この調査はテストではなく、正しい答えも間違った答えも無い、と始めに書いておけば、自分の能力を測られるのではないとわかり、回答者は安心できる。報告者は、導入部分は非常に重要であることが調査をおこなってみて分かった。次に、**質問が複雑**だった。一つの質問で、多くのことが測れるように、質問文を作成したため、質問自体が複雑で、分かりにくくなってしまった。さらに、**予備調査を行っていない**ことである。事前に、小規模集団を対象とした質的研究を行わずに、質問紙を作成している。本来、面接による聞き取り調査を計画していたとはいえ、万一に備え、質問紙も用意して、それを試験的に実施しておくべきであった。そして、**個人情報**をたずねることに対して**説明が不十分**だった。個人情報をたずねる際は、特別に導入文が必要である。回答者のなかには、なぜ年齢や方言（出身地方を聞いているに等しい）の影響を聞かれるのか、不思議に思った者もいたと考えられる。最後に、**質問と次の質問の関連が不明瞭**だった。本調査の質問はA-1、A-2、B-1、B-2の4つから成り、A、Bにそれぞれ文脈を設定したのだが、文脈の人物設定が似ており、A、Bは一連の文脈の質問なのか、それとも独立した文脈の質問なのか、はっきりしなかった。

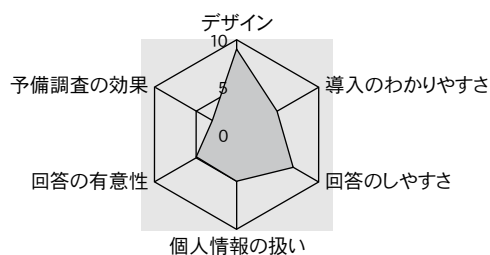


図2 質問紙の自己評価

次に良かった点は、まず、**回答方法が容易**だったことである。本調査の質問紙は、記述式ではなく、項目を選択する方式を用いた。選択肢項目の最後に記述欄を設け、回答者が望む項目が無い場合は、そこに書き込んでもらうようにした。次に、**短時間で回答**できたことである。質問紙A 4一枚とコンパクトなので、5分以内で回答することができ、たとえ忙しくても調査に協力しようという気になったのではないか。さらに、**サンプル抽出が適切**であった。調査の対象全体は、母集団といい、例えば、「女性」「スペイン語学習者」「年齢13~14才」など通例2つ以上の条件によって分類される(ドルニエイ2006:82)。本調査は、結果的に、母集団の条件を「大学生(院生、教員を含む)」、「10~30歳代」、「中国語母語話者」の3つとし、科学的なサンプルの抽出法で一番重要な(同2006:81)無作為抽出法を用いてサンプル抽出をおこなったことになる。最後に、**報告者の態度**である。本調査は、事前に回答者の確保ができなかった。そこで、一人ひとりに声をかけ、本調査は報告者にとって非常に重要であることを強調し、本調査を「売り込む」努力をした。その結果、回答を依頼した人々のほとんどが早く調査に協力してくれ、中には日本語学を研究している同級生を紹介してくれる方もいた。

次に、**疑問点**を挙げる。ドルニエイ(2003:67-68)は、事実を尋ねる質問は最後に持ってきたほうが良いとし、その理由を、回答者は、導入部の一連の説明を読んで、研究のテーマに興味をそそられ、質問に答える気になっている。そこへ、個人的な質問がくるとしらけてしまうためだ、としている。報告者は、逆に、**個人的な情報や事実を尋ねる質問は、導入部で、個人情報の秘密保持を約束した後に載せるほうがよいのではないか**と思う。(本調査の質問紙もはじめに載せているため、上の質問紙自己評価で、チェックポイント5に評定1をつけた。)もし、最後まで回答していき、最後に個人情報を記入する欄があったとする。そこで個人情報の回答を拒否する場合もあるだろう。そうすると、そのデータは、年齢や性別、出身地域でコード分類できなくなり、それまでの回答が扱いづらいデータになってしまい大変もったいない。また、始めに個人情報の秘密保持について理解し、納得しておけば、回答者も安心して回答していくことができるのではないか。

質問紙調査を成功させる最大のポイントは、事前の予備調査と回答者の確保である。質問紙は、ワードプロセッサ機能を使えば、誰でも作成できるように思えるが、限られた紙面と時間で有意な調査結果を導くこ

とができるように作成するのは、非常に難しいということを感じている。質問数が非常に多かったり、回答に時間がかかるような質問であったりすると、回答者が途中で飽きてしまい、真面目な回答が得られない場合がある。回答者には、調査の内容や意義、秘密保持の履行、回答方法を理解してもらう必要がある。しかし、そのことに質問紙の多くを費やすことはできず、短い導入部分に盛り込まなくてはならない。そこで、事前に少人数の集団に調査を行い、導入部分も含め内容と選択肢項目を十分に検討しておくことが重要になる。次に回答者の確保であるが、例えば、学校のクラスを対象に授業の一環として調査を行うことができれば、一度に多くの回答が得られ、真面目な回答が得やすい。さらに、導入部分で説明しきれないことを、教員を通じて、事前に回答者に通知することもできる。

4. 調査結果

調査結果の分析については、稿を改めたいと思うが、今後の研究課題も含めて、質問紙の内容と調査結果について簡単に触れたい。本調査の質問紙内容は大きく分けてA、Bの二つの部分に分けられる。それぞれに文脈を設定した。簡単にいうと、質問者と回答者の判断にズレがある場合と、判断が一致しているが表面上否定で応じる場合を設定し、回答者が最も適切と思う否定応答表現を選択させ、“没有”の使用傾向をみようという意図であった。質問内容⁵を図示すると表1になる。表1の表示について例を挙げる。

- 例1) ・あなた(回答者)は、自分は■であると認識している。
 ・しかし、相手(質問者)に「あなたは□?」と言われた。
 ・そこで、あなたは「 」と否定した。

例1のような場合を■→□→?と示す。

- 例2) ・回答者(回答者)は、自分は■であると認識している。
 ・しかし、相手(質問者)に「あなたは□だ。」と言われた。
 ・そこで、あなたは「 」と否定した。

例2のような場合を■→□※→?と示す。

(※は、「傾き」を表わす成分が明示的にあることを示す。)

表1 質問内容

文脈	質問	ズレと傾きの設定	否定応答表現
A-1	①	■→□	?
	②	■→□※	
A-2	③	□→□	
	④	□→□※	
B-1	⑤	■→□※※	
B-2	⑥	□→□※※	

表2 普段話していることばに、もっとも影響がある方言は北京語であると回答した32名(10~30歳代)の回答結果

質問	応答	選択した表現(上位2つ)	
		1	2
A-1	①	不觉得	没有
	②	没有	不觉得
A-2	③	没有	不觉得
	④	没有	不觉得
B-1	⑤	不是	没有
B-2	⑥	没有	不是

5. 本調査の意義と公表について

本調査は、中国語の否定応答表現に特化したものであったが、質問紙の作成、実施の様子を報告することは、言語研究に限らず、様々な分野で質問紙調査を行う場合にも応用でき、方法論の形で役に立つものであると考える。中国語の否定応答表現は、日本語の否定の応答詞より、形式的に多様であるため、ほとんどが「いや」「い(い)え」と訳される。中国語教学では、「いや」「い(い)え」は主に“不”の否定応答表現をあてて説明されているため、逆に、「いや」「い(い)え」を中国語訳する際、一様に“不”をあててしまうのである。これでは、日本語の否定応答詞を中国語に翻訳する際、不適当な否定応答表現を選択することになりかねない。そこで、中国語の否定応答表現が体系的にまとめられれば、2で述べた中国語教学の不備を補い、同時に日中の否定応答の翻訳の基礎的研究となるだろうと考える。なお、本調査で得られた結果は、「否定応答表現“没有”の選択要因について(仮題)」として『お茶の水女子大学中国文学会報第28号』に投稿したいと考えている。

注

1. 本来、中国語表音ローマ字表記は、ローマ字の該当母音の上に、主に4種の「声調符号」(一、フ、V、\)をつけて表記するが、本報告書では便宜上ローマ字のみを記す。
2. 結論は「“没有”は、質問者の「傾き」を積極的に否定したいときに用いる否定応答表現」である。「傾き」とは、刘月华(1987)が、“意向”“句意倾向”としているもので、質問をする際、質問の答えに対して質問者自身があらかじめ持つ見込みのことを指す。
3. 応答詞を発する側。
4. 田窪・金水(1998)は、感動詞や応答詞を、外部からの言語的・非言語的入力があったときの話し手の内部の情報処理状態の現れであるとし「心的モニター」とその機能を呼んでいる。
5. 本調査及び本研究では、回答者に向けられた発話が疑問の形を取っていなくても「質問」、質問をする側を「相手」と呼ぶ場合がある。

参考文献

申田秀也(2005)「「いや」のコミュニケーション学一会話分析の立場から」言語Vol.34 No.11
 ソルタン・ドルニエイ(2003)『外国語教育学のための質問紙調査入門』八島智子、竹内理監訳 松柏社
 田窪行則、金水敏(1998)「応答詞・感動詞の談話的機能」『文法と音声』音声文法研究会 くろしお出版
 新沼雅代(2007)「“不”の単独使用に関する一考察一表記と使用頻度から」『お茶の水女子大学中国文学会報第26号』
 刘月华(1987)「用“吗”的是非问句和正反问句用法比较」『句型和动词』语文出版社

【指導教員のコメント】

指導教員のコメント 派遣学生にとって、今回のGPによる海外調査は、博士論文作成のための研究の一環をなしている。これまで派遣学生は主として、中国語の否定応答表現について研究してきた。これまで用例としてほとんど用いられることのなかった、テレビのインタビュー番組を資料として用いるなど、中国語発話の生のあり方に迫ろうとした結果、数々の興味深い知見を得て、学会発表等でも注目されている。今回の調査では、これまでの研究結果の検証を主たる目的に、中国での聞き取り調査を試みた。これまで質問調査の経験があまりなかったために、当初予定した発話の録音を行うことができず、質問紙による調査においても試行錯誤を重ねたようだが、得られた結果は、指導教員の予想以上に、派遣学生のこれまでの主張を補強するものとなったように思われる。また、今回の経験が今後の調査において生かされるであろうことも疑いない。報告書にもあるように、派遣学生は今回の調査結果を基にした論文作成を準備中であり、これまでの研究成果と共に、学位申請論文を構成する主要部分となることと思われる。総じて、派遣学生は与えられた機会を十分に生かして、調査を行い、成果を上げたものと認められる。

(人間文化創成科学研究科 教授 宮尾 正樹)